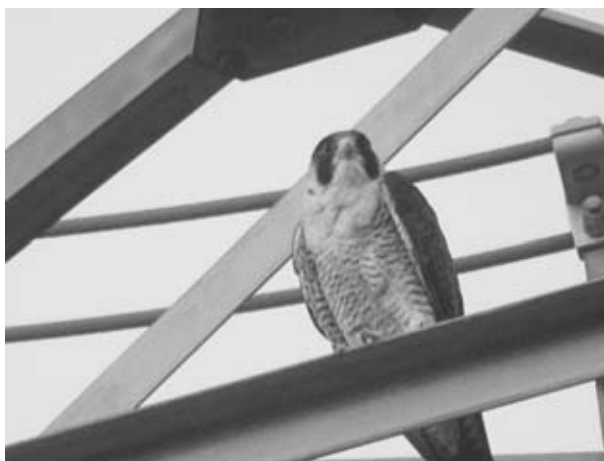


## ハヤブサの落とし物(Part3)

溝田 浩美  
(ひとく地域研究員)

### ハヤブサについて

ハヤブサは主に鳥類を餌としている猛禽類である。餌となる鳥を狩るための広い空間を必要とし、日本では多くのハヤブサが海岸沿いの断崖を営巣場所としている。水平飛行時の最高速度は時速100km前後、急降下して獲物を追う速さは300kmを超える。



### 強くなった？ハヤブサ

体が大きな割には、ちょっぴり臆病で、警戒心の強かったハヤブサだが（共生のひろば2号）、今期は獲物を狙うカラスに対して果敢に反撃するようになった。鉄塔にやってきた20羽ものハシボソガラスを一瞬で追い払ったことがあった。3羽のハシボソガラスに対して11回も空中からの攻撃を加えたこともあった。しかし、この時ハシボソガラスは鉄塔の中を移動するだけでハヤブサの攻撃をかわしている。空中戦を得意とするハヤブサだが、鉄塔上での攻撃は難しいことをカラスたちは知っているようである。

### 鉄塔の鳥たちの世界

ハヤブサが来るこの住宅街の真ん中に立つ鉄塔では、鳥たちが小さな世界をつくっている。



冬の間ハシボソガラスに対して優勢だったハヤブサだが、2月ごろより逆にカラスに追われる立場となる。その後、ハシボソガラスは鉄塔に2羽で頻りに訪れるようになり、巣作りをはじめ。春が訪れるころには卵を温め、5月の初旬には雛が巣立つ（ただし、2006年の巣立ちは大幅に遅れ7月に入ってからであったが）。

またムクドリやスズメたちも4月ごろになると巣の争奪戦を始め、2羽ずつパイプの上で左右に分かれ大騒ぎとなる。太いパイプはムクドリが、細い

パイプはスズメが巣として利用しており、巣材を運びこむ姿が見られるようになる。ハヤブサの餌となった鳥の羽の回収が遅れると、羽はこの両者の巣材としてパイプの中に入ってしまう。食べ残しを狙うカラスやトビ同様、この時期のムクドリやスズメは私にとって手強い競争相手である。しばらくすると餌の昆虫や果実を頻りに巣に運び込む姿が見られ、初夏には巣立ったばかりの幼鳥が親鳥に連れられ飛ぶ練習を始めるようになる。

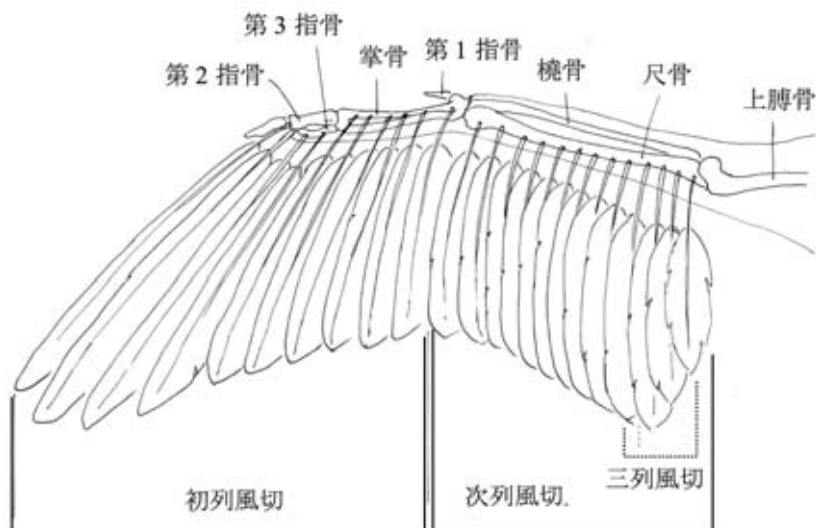
真夏はこの鉄塔が1年で一番静かな時である。昼間鉄塔で鳥たちの姿を見かけることは殆ど

無い。鉄塔の下も非常にきれいで、春の喧騒は嘘のようである。

夏が終わるころハヤブサは再びこの鉄塔で本格的に食事を取り始める。そして、カラスやトビがハヤブサの狩の獲物を求めてやってくるようになる。時を同じくしてムクドリも鉄塔に戻り、辺りも急に賑やかさを取り戻す。このムクドリも鉄塔でのハヤブサの動きを知っているのか、とまっているハヤブサのかなり近くまで行く。しかし、鉄塔から飛び立つときは、いつもなら大きく旋回して戻ってくるムクドリだが、ハヤブサが鉄塔に来ていると、まるで“ダルマさんが転んだ”をしているように急いで戻ってくる。鉄塔の下も見る見るムクドリの糞やペリットで汚れていき、このペリットに混ざった種子を目当てにキジバトが鉄塔の下にやってくるようになる。そして、この丸々太ったキジバトはハヤブサの餌となるのである。

### さまざまな羽

鳥の体を覆っている羽はさまざまな役割を持っている。大きさや形、色の違いがあり、雄と雌、成鳥と幼鳥、季節によっても違いがある。まず、羽には正羽と綿羽があり、正羽は、飛翔羽と体羽に分けられる。飛翔羽とは、風切羽や尾羽など飛ぶために必要な羽のことで、翼を形成する風切羽には初列風切羽、次列風切羽、三列風切羽がある。初列風切羽は翼の一番外側の特に長くて細い羽で、動物の手のひらの部分の骨（掌骨と第2指の指骨）についている。初列風切羽の次に次列風切羽、三列風切羽と続き、腕の部分にあたる骨（尺骨）についている。三列風切羽は一番内側にある階段状になった羽である。尾羽とは文字どおり尾の部分に生えている羽のことで、方向転換やブレーキ、全体のバランスを取ったりする役目もしている。

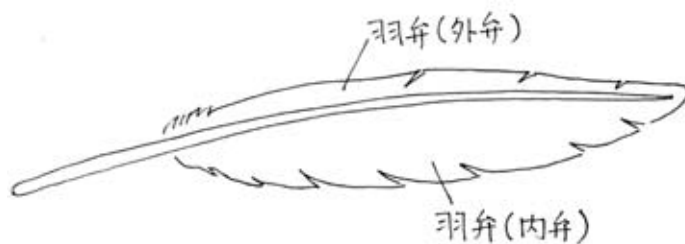


ハヤブサの食事内容の探索には落ちて来た羽が大きな手がかりとなる。今回は今まで回収してきた飛翔羽をもとに、少しずつ分かってきた羽の落とし主の特定方法を述べていこうと思う。

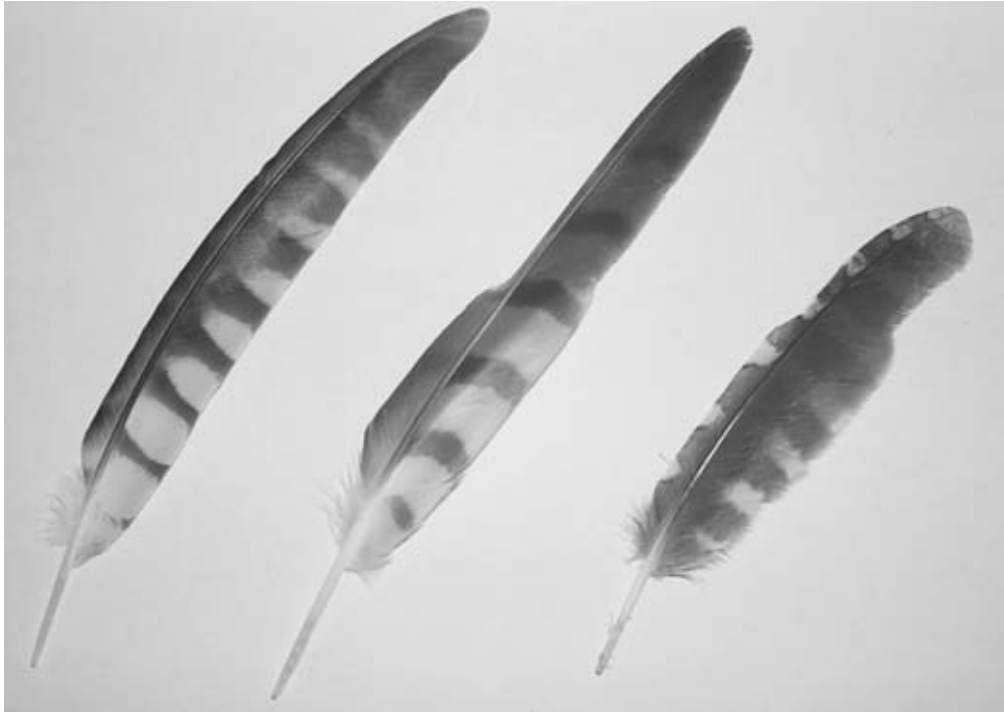
### 語りかける羽（飛翔羽）

飛翔羽は慣れてくると初列風切羽、次列風切羽、尾羽とある程度見分けることができるようになる。そして、カイツブリのように極端に小さな翼のものもあるが、風切羽の大きさで、羽の持ち主の鳥の大きさがある程度予想することが出来る。

羽の形や色、模様も重要な手がかりとなる。たとえば、タカ目の羽には鷹斑と呼ばれる独特の模様があるが、ホトトギス目（カッコウの仲間）の羽にも良く似た模様がついている。このタカ目とホトトギス目を区別する手がかりとなるのが初列風切羽の形である。ホトトギス目の初列風切羽の外弁はなめらかな形をしているのに対しタカ目の初列風切羽には



段刻と呼ばれる段差が入っていることが多い。似たような模様を持つフクロウ目の初列風切羽はやや丸みを帯びた形をしているという特徴をもつが、大きな違いは手触りにある。羽音を消すために羽の表面に細かい毛が一面に生えているため、まるでビロードに触れているような柔らかな感触である。飛ぶ時に音を消すフクロウ類の羽の特徴は新幹線のパンタグラフにも応用されている。



ホトトギス目  
ジュウイチ

タカ目  
ツミ

フクロウ目  
オオコノハズク



ハヤブサの風切羽と尾羽

次列風切羽で特徴があるのはなんといってもカモ類の羽であろう。翼鏡と呼ばれる部分の羽で金属のような光沢があり非常に美しい。また、カモ類の尾羽は羽の先がとがった独特な形をしており、これも羽の落とし主を探す手がかりとなる。

このように一枚の羽が、本当に色々なことを語りかけてくれるのである。



### 美しい落とし物

今回も長谷川太一先生に助けを頂きながら翼の標本を仕上げる事が出来た。ツグミの翼と尾羽の標本であるが、羽の名前や役割を理解する上で大いに役立った。

